
希月ブレイク

スパーミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希月ブレイク

【Nコード】

N3085P

【作者名】

スパーマ

【あらすじ】

異常気象が耐えない町 希月市^{きげつし}

それに加え兄の貴弘の失踪

なぜこのようなことが起きてしまったのか

それを調べるために主人公の旅にでるのであった

序章　ハジマリ

最近希月市の気候はおかしいとしか言いようのないような気候だった。

5分前までは雷を伴う大雨かと思ったら今は快晴だったり真夏の7月にも関わらずに大雪が降ったりしたこと全国ニュースにも取り上げられた

また、このような異常気象は全国各地ではなくここ希月市だけでおきていたのだった。

ちなみにこの希月市は中部地方にある堺奈志県の県庁所在地であった。

しかも、希月市以外の県内の市ではこのような現象は見られなかった

どうなっているのだ・・・

心の中でつぶやいたことは何回もある

もちろん僕だけではないだろう

他の人も思っているであろうことだった

ちなみに僕の悩みはこれだけではなかった

それは兄の突然の失踪。

兄の名前は土屋貴弘高校3年生であった

この兄、貴弘が失踪したのは3ヶ月前であった。

もちろん今でも警察による搜索が続いているが

未だ見つからないのだ・・・

そうだね。名乗るのを忘れていね

僕の名前は土屋智。

海の丘高校に通う1年生だ！！

家族は父・母・妹の岬と共に生活している。

そして僕はまだ知らなかった。セカイを救ことの難しさを・・・

ハジマリの音

僕はベッドからなかなか起き上がれない
いつものことだけど・・・

だって寝るのが好きだからー

僕はそれを心の中でつぶやいていた

「仕方がない、起きるか。」

誰もいない部屋で一人呟いた

自分の部屋行くと母と妹が食卓について

パンを食べていた　ちなみに父はまだ寝ていた。

僕も食べるか・・・

そう思った僕はパンをトースターにいれた

何気なく時計を見たら7：32分って・・・

まずい！！遅れる

学校には幼馴染みのクラスメイト切山彩夏と一緒に通っている

ちなみに待ち合わせの時間は40分である

あゝあまた怒られる

というのは嘘で彩夏はほとんど怒らない

しかし、僕の良心が許してくれないだろう・・・

そう思った僕はパンを急いで口にいれて

あわてて家を出た。

ちなみに僕の家はマンションで

519号室に住んでいるのだが

エレベーターを待つのは時間が長いので

走って階段を下ることにした

ついた頃にはもうバテバテで

これから学校に行くのかと思うと気が遠くなりそうだ・・・

まあいつものことだからなれちゃったけどね

「おはよう、智　また寝坊？」

そう、この声の持ち主は彩夏であった

「ああ、おはよう、いつものことだがすまない」
すると彩夏は

「いいよ いつものことだし 昨日何時に寝たの？」

「え」と 確か1時ぐらい」

「やっぱ遅いね 早く寝なよ」

「まあそういう訳にも行かないんだよPC使わなきゃいけないし」
そんなたわいもない話をしながら20分の道のりがあるいた

「お似合いだねえ」お二人さんwww」

後ろを見ると親友の海野涼介であった

「いつも言っているだろ。そういう関係じゃないって」

「そうだよ、涼介！！」

ちよつと怒りを込めた言い方をした彩夏にたいし涼介は

「冗談だつて 怒るなよwww」

確かに涼介は親友だけど

言葉の語尾に笑いがつくようなしゃべり方でしゃべるのは
やめてほしいと本当に思う

なんて思ったところで直さないと思うけどね

そんな事を心の中でつぶやいていたら

もう学校についていた

僕が通っている海の丘高校は

一クラス40人で四クラス

つまり一学年が160人前後である

学生諸君なら共感できるかもしれないけど

授業中に他の事考えているとすぐ終わるのだな

ちなみに僕は

（隕石が降ってきたらその隕石に、何をするのか）

という下らないことを考えていた

「あゝやつと終わった」

そうだ！ついに終わったのだ

今日という長い日が終わったのだ

「ほら！ のんびりしないで 早く部活行こう!!」

彩夏の明るい声は眠気に効く（笑）

「はいはい、行きますよ」

すると

「お！ もう行くのかじゃあまたあとでなwww」

涼介の声を後に僕と彩夏は教室をでた

ちなみに僕と彩夏は剣道部で

涼介はバスケット部であった

僕は前から友達に勧められ剣道を始めたので

その事をもとに部活を考えたら剣道部になった

ちなみに彩夏は弓道がめちゃうくちや得意だが、

学校に弓道部がないからということと

剣道に興味があつたという理由から剣道部になつたらしい

涼介はもとからバスケットがうまかつたからという理由であつた

「面、面、面、面、めん、・・・」

今日の部活は素振りの耐久レース

誰が一番長く素振りを続けられるかというものだった

これはけっこう大変なんだよ

そして残ってるのは僕と彩夏だけ

「よし、勝つてやる まあたぶんだけど」

そんな僕の言葉に対し彩夏は

「本当に？ 智を勝たせる気はこれっぽちもないよ」

「彩夏って剣道やってるときは性格変わるよね」

「そう？ そんなことないと思うけど」

素振りをしながらしゃべるのはそれほど苦ではない

そんな時僕の頭は良いことを思いついたのだ

「ねえ、最後まで残った方に負けた方が飲み物おごるっていうのは

どう？」

「えっ？ 本当におごってくれるの？」

「彩夏が勝つたらね。ただし僕が勝つたらおごつてよ」
「いいよおごつてあげる」

そのあと僕らはしゃべたずに素振りを続けた
その数は100、200、300・・・と続き
今は550あたりである

さすがに腕が痛くなってきた

「もう無理」

そう言つて僕はそのばに倒れた

「やった〜私の勝ちだ〜」

そうだ、僕は負けてしまったのだ

「約束どおり飲み物おごつてね〜」

勝った彩夏はとても機嫌が良かった

まるで語尾に　がついたかのようなテンションだった

部活を終えて涼介と落ち合つて

僕達は学校を後にした

もちろん帰り道の途中で彩夏の

飲み物をおごつた

確かミルクティーだっけ？

そしたら涼介が

「俺にもおごれ〜」とか言い出して

「なんで？」と冷静に聞いたら困つてた

困つた時の顔は面白かったなwww

そして分かれ道

僕と彩夏は右で涼介が左だったので

「じゃあね」といつて別れた

その後僕と彩夏は二人で5分ぐらい歩いた

その道の途中に

彩夏が変なことを言い出した

これが僕にとつてのハジマリの音であつた

「ねえ、智のお兄さんまだ見つからないの？」

「ああ、そうだけど」

すると

「そういえば、あれ以来お兄さんの部屋に入っていないだね？
のぞいてみたらどう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085p/>

希月ブレイク

2010年12月5日06時38分発行